

Oh,
My God!

This is
my
magical
stick

BUBUBU...

R18



ユキちゃん

ユキちゃんは
オレに

ズン

ウソを
つきました

んなもん
1こや2こ
じゃねーだろ

あ？

何だよ
急に

コレ

見てよ

オレ100万
もらつて
ないよ

100万
100万
おとどきまな

なっ…

弱虫

アレも
ちやんと
嘘だつて
言つただろが

「おまけ」

言つたら
どんなウソ
もいいの!?

キズつけても
いいの!?

オレ良くないと
おもう

「わっ」
めんど
くせエ

人を
上げて
おいて

下げる


そんな
誰も幸せに
ならないウソは

今でも
毎晩のように
枕を濡らす日々


どんだけ
100万欲しいん
だよ

ひやくまん...

あのとき
オレの心は
深くキズつき
ました



だから
ユキちゃんには、
キズついたらオレの心を
癒す義務があります！



ウソをついた
本人には
計り知れない
でしょ

クソ正論
を!!!

オレが
どれだけ
キズついたらか
なんて！

ねーよ

そんな
義務ねーよ

バカ

あーよ

バカって言う方が
バカです

あーもう
しょうが
ねーな!!

何しろ
っつーん
だよ

!!!

ラブホで
エッチしたい

うわー！！
心底聞くんじゃ
なかった！！

ざけん
なよ
テメー

なんの前で
お前の心
に
お前が
オレが



ユキ
ちゃんに
拒否権は
無い!!!

カオこわ

クンシ…
めんどくせー

コイツ一回
言い出すと
せつてー引き下がり
ねーんだよ…

どうする…

一発シバくか…?

いや…
この間塔一郎に
怒られたしな

うん





ユキちゃん

ユキちゃん

……

ん…

あ…

起きてよー

オレも寝て…

脱

ガッパッ

モ
ユキちゃん、
せっかく
二人でこんな
とこ来たのに

寝ちやうって
どうかと思う

おーお前
良い度胸
してんな
クロス

ワと
ケいでう

ゴッ

ユキちゃんは
おしおきです

な

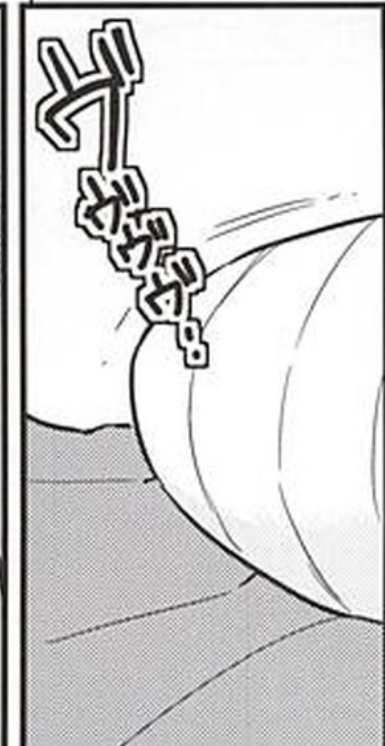
なっ

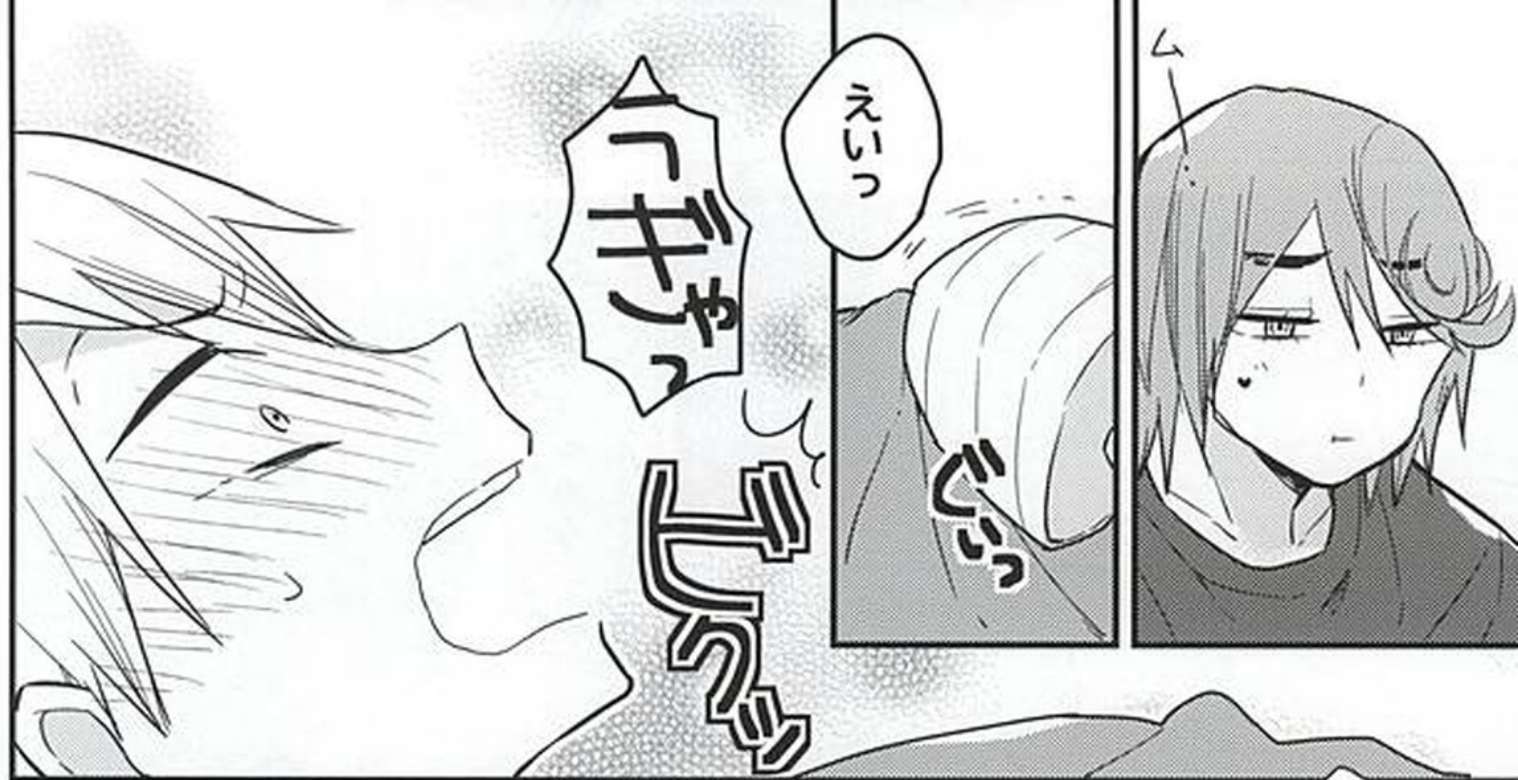
おまっ

そんなモン
どっから…

部屋に
あったのと
そこに売ってた
その
手印も

その
手印も







お前っ
まじで…

はっ…

アッ

ドリキ…

ドリキ…



…っ



☆
いい加減に
しろっ!!

おっと
ユキちゃんの
ネコ足キック

葦木場選手
それをすばやく
かわして

サッ

グッ



バカだ…

あーあー

ギャーッ!!!



今バカ
って思った
でしょ…

うう…

グググ



もう怒った

お前が悪いん
だろオ!!

小学生か!
都合が悪いと
すべて他人の
せいにする
小学生か!

ユキちゃん

ドム



これは魔法の
ステッキです

いやマジで
何言ってるんだ



オレ実は
魔法が使える
んだ

は...?
...急に
何言ってるんだ
...?



今から
ユキちゃんに

いっくっぱい
気持ち良くなる
魔法かけるから



覚悟してね♡

ムク



はあっ

どんな
感じ?

はあっ

はあっ

はあっ



はあっ

はあっ

はあっ

はあっ

さっきまで
何ともなかった
とこまで気持ち
良さそう

もっ...
抜けよ...!



はあっ

はあっ



こことか♡

ここは
どう?

気持ち
いい...?

はあっ

はあっ





拓斗っ...

ハッ...

ジュン

ジュンジュン...

もぉ...ッ

ん...

ジュンジュン

パァァァ



ラブホテル
めっちゃ楽しい!!

葦木場くんは
なつつた大人には





オレがこんなには
おかしくなるのは

お前の、
ま………

魔法のせいだ

カマアア!!



また

魔法かけて
あげるね♡

せう
ごらねーよ!!!

ワッソッソ
今までの人生で
一番ハズカシイ
セリフを……!!!

部活が普段より早く終わってしまったとある休日。

たまには身体を休めることも必要なのだとわかっているけれど、あの練習量にすっかり慣らされた身体は体力を持て余し、座って雑誌を読んでいても、ベッドに寝転んで携帯をいじっていても、どうにも退屈すぎて身体がうずうずしてしまふ。

もう少し走りたけれど泉田に見つかつたら面倒なことになりそう。そんな泉田もどうせ部屋でトレーニングをしているのだろう。自分も筋トレするか……いや、そんな気分じゃないな。かといって勉強という気分でもない。

なんて、ベッドでごろごろしながら暇な時間の過ごし方を考えていた黒田だったが、いい案も浮かばず、いっそのまま昼寝でもしてしまおうかとあくびをしていると、ドアノブがカチャリと音をたてた。

「こんこーん。ユキちゃん、遊びにきたよ」

「おまえ、それがノックのつもりか」

大きな身体を少しかがめた葦木場が、開いたドアから笑顔を見せた。

苦情のようなことを言った黒田だったが、実際に葦木場の行動が不満なわけではない。葦木場もそれがわかっているからなのか、それとも何も気にしていないのか、あいかわらず笑顔のまま、黒田が寝転んでいるベッドの端に腰をおろした。

「なにしてたの？」

「なんにも。ヒマしてた」

「オレも〜」

オレも、と言いながら急に倒れ込んできた葦木場に押しつぶされた黒田は苦しそうな呻き声をもらし、迷惑そうにぐいぐいと大きな身体を押し返した。

「重い、どけ」

「ヒマつぶしできるようなものもないしね〜」

「おい、聞いてんのか！」

「もー、ユキちゃんなんなの。うるさいなあ」

「いーからどけつつてんだろ！」

げしげしと容赦なく蹴ってくる黒田に、痛い痛いと言いながらようやく身体をおこした葦木場が不服そうに頬をふくらませた。

「ユキちゃんの乱暴者！ 悪いユキちゃんはこのうしてやる！」

「ああ？ なに……、おい、やめろ。くそっ、バカ、やめろって！

あつ、うそです。拓斗様、やめてください、お願いします！」

「やめません！」

必死の懇願は受け入れられず、葦木場は黒田の全身を、それはもう楽しそうにくすぐってきた。

「こちよこちよ。ユキちゃん、まいった？」

「まいった！ まいったからもうやめろってば！」

おっとりとした口調とは裏腹に、黒田が身体をよじってギューギュー騒げば騒ぐほど、葦木場の攻撃は激しくなっていく。

脇腹や足の裏への攻撃に涙が出るほど笑っていたせいで、Tシャツ一枚しか着ていないのに暑くて汗ばんできた。

笑い疲れて抵抗が弱まってきた黒田の脇腹に、少しかさついた葦木場の指が直接触れた。どうやら汗をかいて暑そうにしている

黒田を気遣ってTシャツをめくってくれたらしい。

その行動に他意がないことぐらいわかっているのに、肌に直接触れられた瞬間、黒田の身体は小さく跳ねてしまった。

くすぐることに夢中になっている葦木場にはおそらく気づかれないぐらいの反応ではあったけれど、黒田はそんな自分に驚き、さらに上昇した全身の熱を否定するように首を振った。

脇腹をくすぐっていた手の片方が黒田の首元に移動した。汗ばんだ首筋と耳に触れながら動きまわる指に、黒田の口からあきらかに先程までとは別物の吐息がもれる。

一度意識してしまうと、ただ、じゃれていたただけだったはずの葦木場の手の動きがとてもしゃらしいものを感じてしまう。

右手で耳たぶをくにくにといじり、左手は綺麗に筋肉のついた薄い身体をなぞるようにしながら上半身へ移動する。

器用に左右別々の動きをするこの長い指は、鍵盤の上ではもつとなめらかに動くのだろうか、なんて、ついぼんやりと考えてしまった。

「……っ！」

「ん？ どうしたの？」

「……ほんとにやめる。暑い！」

もう満足していたのか、案外あっさりやめてくれたことにホッとする。息を飲んでなんとかこらえたけれど、あやうくおかしな声が出るところだった。

黒田はどくんどくと激しく鳴っている心臓を隠すようにおさえながら身体をおこすと、葦木場に気づかれないようにこっそり深呼吸して気持ちを落ちつかせた。

「はー、楽しかった」

「だろうな……、オレは疲れた」

「あつ、そうだ。ねえ、ユキちゃん」

「ん？」

「大人のおもちや屋さんって店、行ったことある？」

「……は？」

突然なにを言い出すんだ。

そう思ったけれど、葦木場の表情を見る限り、別にからかっているというわけではなさそうだ。

「……おまえ、それがなにかわかって言ってるのか？」

「ううん。個人練習で走ってたときに見かけただけ。中が見えないドアだったから気になって。おもちやさんにわざわざ『大人の』なんてつけるの変わってるよねー。ユキちゃんはどんな店か知ってるんだ？」

「や、知ってるっつーか、その、なんだ」

目をそらし、気まずそうに口ごもる黒田をしばらく見つめていた葦木場だったが、なかなか言おうとしない様子にしびれを切らし、黒田の両肩をつかむと顔をジッと覗いた。

「教えてくれないとまたくすぐっちゃうよ？」

知っている素振りなんて見せなければよかったと激しく後悔しながらも黒田は観念し、渋々説明を始めた。

葦木場とすることをしているとはいえ、改めてこういったことを口にするのはなんとも恥ずかしい。しかも、説明を聞いている様子が真剣すぎではないだろうか。

「……はあ、全然知らなかったよ。ユキちゃんすごいね。なんで知ってるの？」

「なんか色々、雑誌とか、漫画とか……？　　そういやなんで知ってたなんて覚えてねーな」

「まさか、ユキちゃんおもちや使ったこと……」

「ねーから！　実物見たこともねーよ！」

「えっ、そうなんだ！　じゃあ一緒にいこうよ！」

思ってもみなかった提案に目を見開き、「え」とか、「は」とか、

間の抜けた声しか出せなくなった黒田をよそに、葦木場はニコニコとうれしそうに話を続けた。

「オレ、ユキちゃんとおもちやのおもちやで遊んでみたいな。ね、いいでしょ？」

絶対いやだ。

そう強く言っただけでよかったのに、言葉が出てこない。

葦木場の言葉を否定しようとしても、心の中で湧き上がっている好奇心をおさえられない。

「……お、おまえがそこまで言うなら、別に、付き合っただけでもいいけど……でも、あそこの店はやめとこうぜ。あんな学校から近い店、誰に見られるかわかんねーし」

「そっかあ。じゃあどこなら大丈夫かな？」

「あー、たしかあそこにあったな……。街に出たときに行ったごちやごちやした店。あそこは誰でも見れるようなところに置いてあったぞ」

「ユキちゃん……、すっかりチェックしてたんだ……」

うわあ、と引いた声を出した葦木場の顔を黒田は無言で殴り、

ベッドからおりると、部屋着から私服に着替え始めた。

「……行くんだろ。早くおまえも着替えてこいよ」

そわそわと落ちつかない様子で荒っぽく着替えをする黒田を見て、葦木場は、また殴られないようにこっそりと笑いながら立ち上がる、自分の部屋へ戻るためドアノブに手をかけた。

「着替えたら集合ね。ユキちゃんとデートできてうれしいなあ」

「……変なこと言っただけでさっさと着替えてこい、バカ」

背を向けたまま悪態をつく黒田の耳も、うなじも、真っ赤になっただけで、それを見て思わず「ふふ」と笑い声をもらしてしまっただけ。

その声がかげこえたのか黒田がクッションを手に取り、ドア目がけて思いきり投げつけてきたので葦木場は大慌てで自分の部屋に走っていった。

「うわー！ いっぱいあるね、ユキちゃん！」

「デカイ声出すんじゃないよ！」

二人で出かけるのも、電車に揺られるのも、随分と久しぶりな気がした。

それなのに、素直に楽しめるような余裕どころか、もはや後悔しかない黒田は何度も「やっぱり帰ろう」と言いかけたけれど、そんなこと言ったら「ユキちゃん、ビビってるの？」なんて言われかねない。そんなのはごめん。それに、一度言ったことを撤回するわけにもいかない。

そう自分に言い聞かせてこの場所まで来たけれど、目の前にならぶ数々の商品にめまいがしそうだった。

だいたいこんな商品が置かれているのに区切られているわけでもなく、誰でも簡単に見ることができるとおかしな店だ。しかし、そのおかげで自分たちが見ているもさほど不自然でもないし、友達同士で冷やかしているぐらいにしか思われまいだろう。カラフルな商品やジョークグッズのような商品に紛れて、ごく普通のマッサージ器が置いてあるのが不思議だったけれど、なにに使うのかわかり、その生々しさに思わず目をそむけてしまった。

「すごいねー。ローションもいろんな種類がある」

「そうだな……」

「これあったかくなるんだって。へー、でもユキちゃんは冷たい方が刺激あっていいのかなあ」

「ぶん殴るぞ！」

「痛い！ もう殴ってる！」

「つたく、誰かに聞かれたらどうすんだ。さっさと買って帰るぞ」

「ええ、せつかくのデートなのに……。じゃあ、ユキちゃんが欲しいやつ選んでよ」

「ほっ……。欲しいやつなんてあるか！」

ええー、と不満げな声を出す葦木場から顔をそむけると、ずらりとならんでいる商品が改めて目に飛び込んできた。どんな風に使うのかも曖昧な知識しかない。これを使われた自分がどうなってしまうのかなんて想像もできない。

「ねえ、ユキちゃん」

身体を屈めた葦木場に耳元でささやかれ、黒田の身体がびくりと震えた。

「ユキちゃんが気持ちよくなってくれなきゃこんなの使ってもオレ、楽しくないんだけど。嫌ならやめようか？」

わざと言っているのか。それとも無意識なのか。それはわからないけれど、葦木場はしよっちゅうこうしてずるい言い方をすから腹が立つ。

ずるいと思っているのに、葦木場の言葉で、まるで魔法でもかけられたかのように、言い出せなかった本心を口にしてしまうのも腹が立つ。

本当にずるいのは自分だ、と自覚させられるのも、腹が立つてしかたがない。

「……初心者向けのってあんなのかな」

今にも消えてしまいたいそうな、かすれた声で黒田がそう言うと、

葦木場はどことなくうれしそうな顔をした。

「店員さんに聞く？　いてっ！　なんで叩くの！　んー、この辺の小さいやつは初心者向けっぽくない？」

葦木場が手に取ったのはつるりとした形状の、いわゆるローターといわれるものだった。たしかにサイズも小さく、見た目のエグさもないが、葦木場の手に握られている、それだけで黒田はなんとも視線をそらしてしまう。

「あつ、でも普段オレのが入ってるのにこんな小さいのじゃユキちゃん満足できない……うそです。ごめんなさい」

黒田がものすごい形相で睨んでいることに気がついた葦木場がすばやく謝ると、黒田はふう、と息をつき覚悟を決めて葦木場の手からそれを奪った。

「……買ってくる」

「えっ、オレが行くよ？」

「おまえよりオレのが目立たねーから、いい。行ってくる」

「そう？　うん、じゃあよろしく。あ、これも買おうよ」

険しい表情の黒田とは真逆のにこやかな表情で渡してきたのは、さつき見ていた温かいらしいローション。あんなことを言っていたくせに、と黒田がぼやくと、気になるじゃん、と軽い調子で返されたからそれ以上はなにも言わなかった。

「ユキちゃん、おつかれー」

「なんだそれ。別に疲れて……、いや、ちよつと疲れたかもな」
もつと普通に、軽い気持ちで見ることができると思っていたのに、いざあの場に行くことやけに緊張してしまった。隣に葦木場がいなかったら違ったのだろうか。

身体を思いきり伸ばしながらそんなことをぼんやりと考えていると、黒田が持っていたビニール袋を葦木場がヒョイと奪い、中を覗いた。

「わー、入ってる」

「当たり前だ」

「ふふ、楽しみだなあ。ねえ、ユキちゃん、早く遊ぼうよ」

「っ、わざわざそういうこと言うな。……帰るぞ」

「えっ？」

帰るぞ、と駅の方角に足を向けた黒田の腕がつかまれ、びくりとも動かせない。

黒田が振り返り、おそろおそろ葦木場の顔を見ると、心底不思議そうな顔で黒田をジッと見つめていた。

「なんで？」

「なんでって……」

「オレ、今すぐ遊びたいなあ」

不思議そうだった葦木場の表情がバツと笑顔に変わった。

「い、いやだ。帰ってからでいいだろ……」

「ほんとに？」

心臓がどくと大きく鳴ったのが、自分でもはっきりとわかった。

「ユキちゃん、今すごくドキドキしてるでしょ？ 部屋じゃなく、そこらへんのどっかでこれを使うの想像しちゃった？ 楽しみなね。ユキちゃんどうなっちゃうのかなあ」

本当にこいつは、なぜこういうときだけ妙にするどいのか。

「オレねえ、魔法使いだからユキちゃんのことわかつちやうんだ」

「なにバカなこと言ってるんだよ」

馬鹿げている。そう思うのに、隠して、隠して、また「そんなわけない」と否定しようとした気持ちは全て葦木場にバレていたのだからこれ以上なにも言い返せない。

「……無茶したら怒るぞ」

「オレがユキちゃんにひどいことすると思う？」

もうやめろと言っても、夢中になっているときは聞こえないくせに。

心の中でそんな悪態をつきながら葦木場の尻を思いきり叩くと、

黒田はフン、と鼻を鳴らしてスタスタと先に歩き出した。

「せまいね……」

「しかたねーだろ」

たまたま通りがかったゲームセンターのトイレは個室も複数あり、ここなら誰かがきても急かされることのないだろう、と二人はここそと個室に入った。

ゲームセンター特有の騒がしさのおかげで物音や声もあまり気にならないのもありがたい。

「なんか悪いことしてるみたいでドキドキするね」

「……おう」

「緊張してるの……？ ユキちゃん、かわいい」

かわいい、なんて言われてもちっともうれしくない。それなのに、まぬけ面であれしそうにしている葦木場を見ていたら黒田の緊張は少しづつほぐれていった。

葦木場は狭い個室で動きにくそうに身体をかがめると、黒田の唇に自分の唇をそっと触れさせた。黒田も無意識に葦木場が触れやすいように顔を上げ、目を閉じてそれを受け入れた。

「ユキちゃん、好きだよ」

キスをするたび、葦木場は好きだと伝えてくれる。

それはくすぐったいけれどやっぱりうれしくて、照れくさくて、黒田は言葉で気持ちを伝えられないかわりに葦木場の身体に思いきり抱きついた。

頭を優しく撫でる葦木場の手がときたま首筋をかすめる。それだけで黒田の身体は少しづつ熱くなってしまう。抱きつく腕の力が強くなったのを感じ、葦木場は微笑みながら黒田のつむじに唇を落とした。

「ね、ユキちゃん。ここに乘れる？」

蓋をした状態の便座に乘るように言われ、つい、これから自分

がされることを想像してしまった。

しかし、このままためらっているわけにはいかない。意を決してストン、と座ると、葦木場が首をふるふると振った。

「違うよ、逆。ここに足のせて、こっちにおしり向けて」

「まじかよ……」

あからさまに嫌な顔をする黒田のことは気にもせず、葦木場は「はやくはやく」と黒田の身体を強引に乗せ、タンクに上半身を預けさせると腰をつかみ、尻を突き出す体勢へとうながした。

葦木場の大きな手が器用にベルトを外し、下着ごとずりおろす。キスだけで少し反応していた黒田の性器が解放され、まだ触れられてもいないのにびくびくと震えた。

長い足を折りたたみ、無理矢理しゃがんだ葦木場は随分と狭苦しそうだった。葦木場がしゃがんだことで顔の位置は黒田の尻に接近してしまい、痛いくらいの視線を感じた黒田は振り向くことができない。

「まっしろ。かわいい」

突き出されたさらさらの尻を撫でながら葦木場がそんなことを言うせいで、黒田の羞恥心はすでに限界に近づいていた。

「な、はやく……」

「もー、せっかちなあ」

唇を尖らせ、文句を言いながらも葦木場は買ったものを袋から出し始めた。ビニールのガサガサとした音さえも耳をふさいでしまいたくなる。

「これも買ったってよかったね」

黒田がなにも返事をしないことも特に気にした様子はなく、葦

木場は楽しげに、買ったばかりのローションを手のひらに落とすていく。

「あったかい……かな？ まあいつか、つけるね」

ローションにまみれた指が尻の間に差し入れられた瞬間、黒田の身体がビクンと跳ねた。

しわを撫でるように葦木場の指が動く。中心をくにくにと弄られる感触はいつまでたっても慣れなくて、黒田はギョツと目をつぶり、無意識に息まで止めていた。

「う、あ」

ゆっくりと指がナカに入り込んできた。葦木場の指は細長く見えるのに、こうして入ってくるとやはり見た目より太く感じる。

まだ一本しか入っていない指の圧迫感に必死に耐えていたら葦木場の唇が太ももに触れ、何度も優しく、やわらかいキスをしてくれた。

黒田の緊張が少しずつほぐれてくると、ローションが足され、もう一本指が入ってきた。ぐちゅぐちゅと嫌な音が響く。黒田は自分の手で口を塞ぎ、今にも出てしまいそうな声をなんとか堪えていた。

葦木場の希望で購入したローションは確かに普段のものより熱をもっている気がするけれど、そんなものよりも、体内をかきまわしてくる指の方がずっと熱く感じる。

何度も抜き差しされ、指を開いて穴を広げられる感覚に腰が揺れる。

「ふふ、ナカまで見えちゃいそう」

「ば、か、そーいう、の、やめ、」

気を抜くと自分からどんな声が出てしまいかかわからなくて、黒田は荒く呼吸しながら、とぎれとぎれに言葉を絞り出した。

「これ、もういれていい？」

手にしたローターを黒田に見せて、入れていいか確認をとる葦木場の声もなんだか熱っぽい気がした。

黒田がうなずくと、うしろにつるりとした物が当てられ、それがゆっくりとナカに入ってきた。さほど大きくないそれはあつさりど飲み込まれたが、指のように体温を感じるわけでもなく、ただの物体でしかなくて、こんなものか、と拍子抜けしてしまった。

別に気持ちいいものじゃないな、そう告げようとした瞬間、強い振動を感じて思わず息を飲み込んだ。そうだ、すっかり頭から抜けていたけれどこれはそういうものだった。

「わー、ぶるぶるしてる」

「んんっ、うあつ、や」

「抜けちゃいそうだからもうちよい奥にいれるね」

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

葦木場の長い指で奥に入れられ、抜けないか確認しているのか、指でおさえつけたその位置は、ちょうどよく黒田の前立腺を刺激してしまった。

突然の強すぎる刺激に黒田は腰をがくがくと揺らし、涙も唾液も垂れ流したまま、ひっきりなしに声をあげた。

「わっ、ユキちゃん大丈夫？」

問いかけにまともに答えることもできず、意味を成さない声をあげながら首を振って無理だと訴える黒田に葦木場のノドが上下した。

「ね、ユキちゃん。これ入れたまま遊ばない？」

「あ、そぶ……？」

「うん、ゲーセンで」

「なっ！」

葦木場の提案に動揺する黒田の身体を引き寄せ、ギョツと抱きしめると、葦木場は耳元で熱っぽく囁いた。

「ユキちゃん泣いちゃってかわい……。こんなユキちゃんほんとは誰にも見せたくないのに、かわいすぎて見せびらかしたくなってきた……」

「なに、いつて、んうっ、」

無理な体勢で興奮ぎみに唇を奪われ、苦しいのに、黒田は自分も興奮しているのを感じていた。

後ろはいまだ振動を続けるローターに刺激され、触れられるのをずっと待っているかわいそうな性器からは驚くほど先走りが溢れ、びくびくと震えている。

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

「っ！ ひっ、そこ、やめっ、ああっ！」

トイレから出るとそこには笑顔でゲームを楽しんでいる人たちがたくさんいて、体内に響く弱い振動とその光景のギャップが黒田の足を一瞬止め、進むことをうながす葦木場の手にも大袈裟に身体が震えた。

あのおそろしいぐらいの快感では歩くことすらできないので位置は多少ずらしたけれど、動くたび、あそこに当たったら、こんな、知らない人たちの目の前で自分がどうにかなくなってしまったら、そんな想像をしてしまう。

完全に勃ち上がっているそこを気にして、隠しているのについて上着を引っ張ってしまふけれど、これももしバレたらと思うと汗が止まらない。

「あつ、これやろうよ」
のほんとした声で葦木場が一番端っこにあるクレインゲームを指さした。これなら身体を動かすわけでもないし、なんとかなるだろう。

葦木場が小銭を投入し、あの黒猫のぬいぐるみがいい、と黒田をクレインゲームの正面に立たせた。

なるべく余計なことは考えないように、ぬいぐるみを見つめてクレインを操作する。「この辺か?」「よし、いい感じだ」頭の中でひとりごとを言いながらクレインが下がっていくのを見ていた黒田の腰に葦木場が手をそえた。

右隣は壁だし、葦木場の大きな身体で自分は隠されているだろう。それでも落ちつかなくて、やめさせようとしたら、葦木場の手が腰から移動して、尻を撫で始めた。

「おい、やめ、ろ」

「ユキちゃん気づいてる? すごくえつちな顔になってるよ? ほら、ガラスにうつってる」

うそだ。そう言いたかったのに、思わず見てしまったガラスにうつる自分の顔は、頬が赤らみ、なにかを求めるように半開きになった口元がだらしなく、とても直視してられる顔ではなかった。

「あ……、んうっ!」

黒田の尻の割れ目を葦木場が押したせいで、油断していた黒田の口から声が漏れてしまった。ズボンの上からとはいえ、ローターの存在を意識するには十分な刺激で、微弱な振動がもどかしく思えてしまう。

こんなものじやたりない、と強請るように、ぎゅうぎゅうと締め付けているのが自分でもわかってしまい、恥ずかしさで顔が熱くなる。

「あーあ、落ちちゃったね」

クレインで持ち上げられた黒猫は、目を離れた隙にぼとりと落ちてしまった。

残念、とぬいぐるみを見つめる葦木場の服がグイと引っ張られた。

「どうしたの、ユキちゃん」

「も、いいだろ、っ」

「……ユキちゃんが上手におねだりできたら、いいよ」
につこりと微笑む葦木場をいつもみたいにポカリと殴ってやりたいのに、身体中から力が抜けてしまったようでそれすら上手くできない。

「くっせ、はやく、抱けよバカ」

「うわあ……、ユキちゃんってほんとにかっこいいね……」

「うるせー……」

もうなんでもいいからさっさとしろ。

かすれた声でそう告げ、うつむいた黒田のうなじがやけに色っぽく見えた。

さつきと同じトイレの個室に戻ってきた二人は、唇に噛みつくようなキスをしながらぎゅうぎゅうと抱き合った。お互いが普段よりずっと興奮しているのが伝わってくる。

背中にドアがぶつかってこれ以上後ろに下がれないのに、黒田がぐいぐい身体を押しつけてくる。体勢が悪いな、と葦木場が便座の蓋の上に腰をおろした。

「ユキちゃんのここ、すごく硬くなってる。オレの足に擦りつけてやらしいなあ。そんなにえっちな気分になってるの？ オレよりおもちの方が気持ちいい？」

「っ、んなわけねーだろ、……はやくおまえの、挿れろよ」

「ん、ユキちゃんがオレのおつきできたら挿れたげる。それと、おまえじゃなくちちゃんと名前で呼んでほしいな」

「ちよーしのんなよ、拓斗」

悪態をつきつつも言うことは聞いてくれるらしい。まだナカに入っているローターを気にしながらしゃがんだ黒田は、葦木場のベルトを外し、自分のより随分と重量のあるそれを取り出した。

先端に軽口づけ、根元を手で抜きながら途中で唾内に飲み込むと、舌先を必死に動かした。

自分が刺激することで硬くなっていくのがうれしくて、ぐぼぐぼと音を立てながら必死に唇で扱く黒田の髪を葦木場が撫でてくれた。

「きもちいーよ、ユキちゃん。サイコー」

完全に勃ち上がったそれを口から出し、周りにねつとりと舌をはわせる黒田の姿があまりにもいやらしくて、葦木場もそろそろ我慢の限界だった。

「もういいよ。おいで。あつ、下脱いでからね」

言われるがままに自ら履いているものを脱ぎ、タンクの上に置くと、葦木場の太ももに跨った。葦木場が足を広げているせいで、自然と黒田も足を開かされてしまう。

「ふふ、こんなに足開いたらおもちや落ちてきそう」

葦木場がローターにつながっているコードをくいくいと引っ張るのが刺激になり、黒田の腰は揺れ、先走りがまた溢れ出してきた。

「あ、っ、や、やあつ」

「すごく気持ちよさそうだけどこれ抜いちゃっていいの？ このまま挿れる？」

「ん、あ、むり、ぬけつ、たく、拓斗のが、いいっ」

「うれしーな。わかった。力抜いててね」
葦木場の手が背後にまわされ、慎重にローターを引き抜いていく。

「うあつ、はっ、ああつ！」

「もうちよい……、抜けた！」

鈍い音を出して振動しているそのスイッチを切り、ぐったりともたれかかってきた黒田の背中を撫でると、汗ばんでしっとりとした髪に唇を落とす。

「ユキちゃん、ごめん。もう挿れたい」

「……さっさと挿れろって言うてんだろ」

「ありがと、挿れるね……、っ！」

「くっ、あああつ！」

あんな小ぶりのローターとは比べものにならない圧迫感。焦らしていたのは葦木場なのに、よほど我慢していたのかいつもよりぐいぐいとねじ込んでくる。

その強引ささえも快感に変わり、身体も、頭の中も、全部葦木場に支配されてるみたいだ、なんてことを考えていたら黒田は思わず笑ってしまい、気づかれないように顔を葦木場の胸元に埋めた。

長時間焦らされた黒田も、興奮がおさえられなくなった葦木場も、あつという間に限界が近づいてきた。

「た、たく、と、オレ、もう、いきそ」

「オレも、でそう」

「あつ、あ、たくとつ、ああつ！」

「ユキちゃんっ、うあつ！」

「あ……、つかれたあ……」

「初めて中出ししちゃった……」

「だまれ、言うな」

「ユキちゃん、ごめんね……、怒ってる？」

「べつに」

泣きそうな顔で機嫌をうかがってくる葦木場のほつぺたを黒田は軽くつまんでやった。

「さっきまであんな強引だったくせに、なんだよその顔」

「だってえ」

「……オレも楽しんじまったから、ほんとに怒ってねーよ」

その言葉に安心したのか、葦木場が笑顔で思いきり抱きしめてきた。


「苦しい！」

「へへ、早く帰ってもつかいシよ」

「……は？」

だってオレ、まだ全然シたりないもん。

満面の笑みでそう告げる葦木場に、もうどうにでもしてくれ、とつぶやいた黒田は、めずらしく自分から思いきり抱きついてきた。



20151004
yowamushi pedal
unofficial fan book
ashikiba-kuroda